

## 過密社会が孕む矛盾

兵庫福知山線の脱線事故が大惨事になってしまった。ハンガリーの友人たちから、鉄道先進国日本でも、こんな事故が起るのかと質問された。この事故の原因究明の中で、いろいろなことが判ってきた。

まず、過密ダイヤで、時刻厳守の励行期間には運転手は一秒単位の遅れを報告する義務があることだ。まるで機械のように運転することが強制されている。世界中で、秒単位で電車を走らせているのは日本だけだろう。あらゆる社会システムに言えることだが、緩衝装置（バッファー）が組み込まれていないシステムは、変則事態や突発事件にたいしてきわめて脆弱だ。許容（バッファー）時間を持たない電車運行は、不測の事態にたいする対応を最初から排除している。このことが持つ意味は重大である。

次に、オーバーランを繰り返した運転手には、研修と称するほとんど無意味な自己反省プログラム（日勤教育）が用意されていることだ。誰が何を目的に、白痴的な教育を考えついたのだろ

うか。屈辱的な研修を押しつけることで、運転手の技量が向上するだろうか。オーバーランの「神の手」が伝説のように伝えられるスポーツの方が、はるかに大らかで自然だ。日本はこんな風にお互いを監視しあって、告げ口する社会なのだろうか。日本の中にいると異常性になる過密社会が生む行動様式だと言える。他人のことがとても気になるのだ。他人のことを気にする余裕があれば、自分のことを考えた方が余程益になるとと思うが。メディアもメディアだ。些末なことを全部ニュースにするから、「そんなことが重大ニュースになるなら」と、我も我もと、どうでも良いことまで告げ口する習慣が出来上がっている。

### 仕事の機械化現象

日本の社会は失敗にたいして厳しい。もちろん、失敗が致命的な損害をもたらす場合には、失敗しないシステムを構築することは至上命令だ。しかし、社会のすべてのシステムが百分の確率で、失敗なく機能することはない。とくに、人間による操作が主たる部分を占めているシステムでは、失敗があらうこと前提に、システム管理を構築しなければならない。

し移動すれば済むことではないか。運転手を責める前に、どうして乗客を移動させることができないか。そのことも良く考えてみるべきだ。それから、興味深いことに、会社の厳しい管理制度とは裏腹に、社員の内輪の集まりや飲み会、幹部たちのゴルフなどが、平日でもかなりの頻度で催されている。実習船「えひめ丸」の事故の時には森首相のゴルフが、新潟の誘拐事件被害者救出の時には警察署長と監査官のゴルフや宴会が報道された。事件が起きる度に、内輪のゴルフや宴会が暴露されるというのは、たまたま運が悪かったからだろうか。そうではなくて、かなりの頻度でこの種の会合が日常的にもたれているから、それなりの確率で表沙汰になると考えた方が良いのだろうか。

これらのことはそれぞれ別々に関連なく生起している事柄ではないはずだ。日本の会社や日本社会に特有な一つの特徴を示しているのではないだろうか。

### 不寛容と告げ口

この事故があつてから、全国紙やNHKの全国ニュースで、電車のオーバーランが何度も報告された。どうして、二〇mや三〇m程度のオーバーランが全国ニュースになるのか。オーバーランしたら、余程の距離でもないかぎり、最後尾の車両の位置に立っていた人が、移動すれば良いだけではないか。地下鉄だって、電車が到着して連結車両数が少ないことが分かった時には、お客は走って移動している。一々、スピーカーで知らせなくて、その程度のことは子供にだつてできる。

### 逆に発想してみよう。もしすべての社会システム

が完璧に機能しなければならないとしたら、社会や人間が機械と同じになってしまう。そういう社会に生活して楽しいだろうか。だが、日本のような過密社会だと、いつの間にか多くの人が機械のようになってしまう。

日本のファーストフード店やレストランへ行くと、店員がまるでロボットのように、暗記した文言を繰り返す。いつたいこの子たちに人間的な感情があるのだろうか、と不思議な気持ちになる。駅員のアナウンス、バスのアナウンスなども、日常生活とは違う声やトーンで喋る。この人たちはまさか、家でもこんな声や調子で話しているのではないだろうと思うが、仕事場ではとにかくまるでアナウンス機械に変身してしまう。他方、ヨーロッパではもう少ししきちゃんとお客様に対応してもらいたいと感じることが多い。とくにハンガリーでは著しく人間的な対応に出会う。機嫌が悪いときには無愛想に、機嫌が良いときは愛想良く対応する。知り合いが来ようものなら、他の客そっちのけで、私的な会話を埋没する。

このどちらも極端だが、明らかに過密社会と過疎社会の特性から説明できる。過密社会だと、一々、愛敬を振りまく余裕はない、とにかくお客様の対応に追われ機械のように仕事を処理しなければならない。

だから、働いている時間は自分の時間ではない。その割り切りがはつきりしているから、機械的対応になる。ところが、過疎社会の場合には、切羽詰まった状態にない。だから、ふつうの日常生活と同じ態度で、お客様にも対応する。態度を変えて、自分を機械に変身させる必要がないのだ。

### 何故、宴会が多い

それにしても、いろいろな宴会や集まりがあるものだ。それも皆、仲間内の、多分、男だけの集まりだろう。機械的な仕事のストレスを仲間通しの宴会で発散するのだろうか。日本社会の仕事と宴会の関係は、社会学的分析対象として興味深い。

日本の仕事場はいわば戦場の感覚に近い。とく顧客相手のビジネスではそうだ。私心を殺して、仕事人間、いや仕事機械に変身する必要がある。こういう仕事の最前線で働く者は戦友仲間だ。仕事が終わると、また人間に戻る。闘いが終わったところで人間に戻り、互いに慰め合い、互いに愚痴を言い合う発散の場が必要になる。車掌会であれ、同期会であれ、同じ前線の仲間が、後方基地でストレスを発散したり、戦場を懐かしがつたりする場が、戦友同士の宴会でありレクリエーション会なのだ。もつとも、幹部役員の場合はやや意味が違う。多くの場合、退役でゴルフに行ったり、社費で宴会をやりりする。同期の会のように、自腹で遊ぶのではないか。これは醜い。

男が減私で働き、仕事が終われば仕事仲間と愚痴を言い合い、宴会したり、遊んだりする。女はこそ後方支援で、子供を叱りながら、別の生活を送っている。ヨーロッパに住んで、ここから日本の生活を見ると、何かが変だ。物質的には物凄く豊かなつたけれど、日本人の生活の文明度がちつとも向上していないように感じるのは錯覚だろうか。とにかく、生活に余裕がない。過密社会でも、もつと余裕をもつて生きる途はないのだろうか。